

信濃川大河津資料館友の会だより

大河津分水 俳句を楽しむ会

9月27日(土)に“大河津分水 俳句を楽しむ会”を開催します。大河津分水の風土や志を感じながら俳句を詠んでみませんか?詳しくは別紙のチラシをご覧ください。皆さんの参加をお待ちしています!



昨年の大河津分水 俳句を楽しむ会の様子

サケまつり・大河津分水クリーン作戦・友の会講演会

秋になると信濃川と大河津分水にはたくさんのサケが上ってきます。信濃川に上るサケを特別に捕獲し、サケ汁にして来場された方に楽しんでいただきます。信濃川の恵を感じながらサケ汁をいただきますよ!!

なお、サケまつり開催前には日頃の大河津分水への感謝としてゴミ拾い活動を中心に“大河津分水クリーン作戦”を行います。サケまつり開催後には講演会“長善館と大河津分水”を行います。詳しくは別紙のチラシをご覧ください。

※“サケまつり”のお手伝いをしてくださる方、材料を提供してくださる方も募集中です!!
ご協力いただける方は友の会事務局までご連絡下さい。



昨年のサケまつりの様子

国上山散策ツアー

10月25日(土)“国上山散策ツアー”を開催します。山登りに自信がない方でも大丈夫です。皆で国上山に登りましょう!! 散策ルートや服装については別紙のチラシで紹介していますのでご覧ください!



国上山から見る大河津分水

川の物語発表会

11月22日(土)に“川の物語発表会”を開催します。友の会会員には郷土や川について、研究や調査されている方がたくさんいます。そこで、会員の皆さんの日頃の研究の成果や川にまつわる歌や芸能を発表していただきます。

発表を希望される方や聴講を希望される方を募集していますので、ご希望の方は事務局までご連絡下さい。



昨年の川の物語発表会の様子

講座への参加を希望される方は、【講座名・氏名・住所・連絡先・参加人数】を友の会事務局までご連絡下さい(TEL.0256-97-2195 FAX.0256-97-2196)。定員に達し次第締め切らせていただきますのでご了承下さい。

イベント報告

大河津可動堰見学ツアー

6月28日に行われた“大河津可動堰見学ツアー”では、普段入ることのできない可動堰管理橋や新可動堰改築工事現場の中に入り、越後平野を守る可動堰について勉強をしてきました。



現在の可動堰管理橋では老朽化による問題等を説明していただきました。



新可動堰の基礎杭の様子です。来春にはここに堰柱が出来るそうです。



すでに完成している堰柱の大きさに参加者の皆さんも驚いていました。

バスツアー梓川・上高地事前学習会

6月28日に行われた“バスツアー事前学習会”では、松本砂防事務所の取り組みと題したビデオで梓川と上高地の勉強を行い、畠山事業部会長より行程の説明がありました。



バスツアー梓川・上高地

7月5日、6日に行われたバスツアーでは、信濃川上流の梓川・上高地を視察し、関係施設を巡りました。“砂防施設の必要性を理解した。素晴らしかった。”“平成18年の災害の爪あとが所々見られた”など、上流域の水害や砂防について参加者の皆さんは勉強になったようです。



梓川テブコ館



釜が淵砂防堰堤



上高地（河童橋）

～バスツアー梓川・上高地コース～

1日目

- ①松本市山と自然博物館
- ②梓川テブコ館
- ③梓川流域砂防施設

2日目

- ①釜が淵砂防堰堤
- ②上高地（河童橋→明神池・梓川床固工群）
- ③山辺ワイナリー

乗鞍温泉も最高でした！！



バスツアー・梓川・上高地 探訪報告会

7月5日、6日に開催した“バスツアー・梓川・上高地の報告会”を7月19日に行いました。バスツアーに参加した皆さんから写真を使って視察箇所の感想を話していただきました。



バスツアー・梓川・上高地 探訪報告会の様子

双書発刊に伴う講演会

大河津分水双書第8巻「田園型政令市『新潟』の誕生」の発刊に伴い、執筆者であり友の会顧問の五百川清さんよりお話をいただきました。新潟築港と大河津分水の関わりなど、8巻に掲載されている写真を交えながらお話をいただきました。五百川さんの講演に、参加された皆さんは熱心に聞き入っていました。



双書発刊に伴う講演会の様子

今号の可動堰

新可動堰完成に向けて、可動堰周辺の定点撮影を紹介します。

洪水期である7月から9月までの3カ月間は、仮締切内の工事を一時中断しています。10月からは可動堰本体の堰柱や管理橋工事が始まる予定です。

なお、下流部の低水路掘削工事や五千石遺跡の発掘調査は現在も進められています。



右岸堰軸から撮影
(平成20年8月31日撮影)



右岸堰軸から近景を撮影
(平成20年8月31日撮影)

これまでの工事や今後の工事予定などは大河津可動堰情報館で紹介しています。大河津可動堰改築事業をわかりやすくご覧いただけます。

大河津可動堰情報館 URL <http://www.hrr.mlit.go.jp/shinano/kadouzeki/>



大河の畔

友の会会員 中村 庄平

まず詩をひとつ。「白日は西山に傾きて燃え信濃川分水は海に連なって尽きる、千里の先を窮めんと欲して更に背伸びするも碧空の果て片雲は悠々。」

水の源は長野、山梨、埼玉三県の国境で甲武信ヶ岳ときく。標高は 2475m、新潟市関屋分水までの幹川流路延長はゆうに 367 キロの長きを数えるとも。この分水より上流約 50km の地、右岸、中之島よりの向い山脈は平野に随って尽き蛇行して流れる川幅はゆうに 1 km 以上にも及ぶであろう。その兩岸の水幅の真中に孤峯の弥彦山がちょうど水に浮んだように見える。この比類稀なる絶景は何人が観ても絶句するほどのもの。富士山系をも凌駕するやも知れぬ。更に眉上げて眼差しを南すれば涛々と流れ下るその水面は盡ることなく、千里万里の遙か彼方の天際より流れくるかとも、又眼前の中州の馬越島は近年その姿をすこしづつ変えてゆくを見る。尚、晴夜にかがやく空中の弧月輪は皎々として川波を照らしアラレの如くきらきらと輝く、この飽かぬ風景の大パノラマを初めて観た人は誰であったろうか。

されど往時には度々降雨による大洪水によって氾濫決壊したと聞く。横田切れもその 1 つで、右岸中之島側の館興野などの堤防決壊は数回にも及び隔年に渡り死ぬほど悩まされたと聞く。先人の苦労を想えば整備された現在の信濃川に感謝するばかりで大河の潤す沃野は広く、その恵みによって人生代々窮り已むことはない。



新生分水に寄せて

友の会会員 高木 正伸

「天災は忘れた頃にやってくる。」寺田寅彦博士の言葉であるが、実に我々人類は地球の怒りを不死鳥の如く克服しながら、今日在ることを悟る。交通事故や火災等の人災もさることながら、私の記憶に残る災害でも昭和 30 年代の台風、豪雪、大火、地震があり、昨今、また身近に中越地震、中越沖地震、三条辺りの洪水などや世界的にも中国やインド洋等での地震や津波など正に地獄絵図を知る。

かつて分水も歴史に残る横田切れや近年では石港、野中才辺りの堤防での間一髪の状態は記憶に新しい。今、新しい工学技術を駆使しての堰作りに努力されていることの御苦勞に感謝し、先人の御苦勞や犠牲になられた方々の御冥福を祈る次第で、今、私達のふるさと「人づくり 物づくり 自然を生かした町づくり」をうたい「水の文化と良寛の里」でもある。今や平成維新の 1 人 1 人意識改革と 21 世紀の新しい時代に入ってきたことを感ずる。それこそ無駄、無理をなくし、一から全てを見直し再生して行かねばならない時代であり、負の遺産を子孫に残すべきではないし、今や地球的、世界的規模で物事を考えつつ、身近な課題に対処して行くべき時代で、「世界は 1 人のために、1 人は世界のために」、そして「エゴからエコへ」心田を耕しつつ、各界、各層、各位の一層の御尽力を希望してやまないものである。生命の水、生活の水、産業の水たる千曲川、信濃川その他幾多の河川に感謝と同時に、山や森に孫を。ふと思う。正にノーベル賞級の海水を真水にする科学技術の進歩を。人類と他の生命の未来のために。

幼き頃、渡部橋や野積橋の木橋を渡ししことやトロッコ等がまだ在り、青春時代に人生に苦勞した頃川べりを散策したこと等等、思い出が甦り時の流れを感じずる今日この頃です。人生は生涯学習修養なのかもしれません。

次のご指名は杉本俊哉さんと花岡一子さんです。